

御言葉を宿らせて

「コロサイ人への手紙」3章12節から17節までを朗読。

16節「キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊かに宿らせなさい。そして、知恵をつくして互に教えまた訓戒し、詩とさんびと霊の歌とによって、感謝して心から神をほめたたえなさい」。

「キリストの言葉」、これは神様の言葉、いうならば聖書全般、創世記から黙示録の終わりまでその全てを指して「神の言葉」と信じて受けます。聖書は、神様の靈感に導かれて書かれたものと言われて

「テモテへの第二の手紙」3章16,17節を朗読。

16節に「**聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたもの**」とあります。「創世記」から「黙示録」に至るまで、聖書の全ては、神様の霊に導かれ、神様の御心が語り継がれたものであると語っています。長い年月をかけて、神様がその時々、時代に応じて、人を選び、その人に神の力、霊を豊かに注いで、神様の御思い、御心を語り継がせたものが聖書であります。決して一人の人が壮大な計画をもって、起承転結を考えて、初めがあり、変化があり、結論となるような一つの流れとして書かれていません。私たちがよく読む小説やいろいろな書物は、著者といわれる人が、自分の考えるところ、思うところ

ろを順序正しく相手によく分かるように説明していきます。聖書をそういうものとして読もうとするとがっかりします。支離滅裂、どこからどこへつながり、何がどうつながっているのか、訳が分からない。それは当然のことでありまして、神様がご自分の思いをその時代時代、いろいろな人を通して語らせたものですから、その時々に応じて神様の御心が語られています。といてこの聖書に神様の御思いがことごとく記されているわけではありません。神様の御思いは聖書に沢山の言葉で語られています。神様の御思いが隅から隅まで全部詰まっています。しかし、神様の御思いはさらに大きく、聖書だけで語りつくすことはできません。神様の思いをすべて知りつくすことは不可能です。あくまでも私たちに対して、神様が、伝えたい、語りたいたいと思うほんの僅かな部分が、聖書を通して伝えられている。その中心点は、神様によって造られた人の、本来あるべき生き方をきちんと導く指針として、手引きとして書かれた。そのことが16節に「**靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導く**」と言われます。いうならば、まことの人として、創世の初め、人がまだ罪を犯さなかった時に生きていた人間の性質、生き方、これをきちんと取り戻すものとして、神様が与えて下さった言葉であります。聖書は、全巻を通して常に私たちが神様の前にあるべき姿勢、歩むべき道筋、また神様が私たちにどんなことをして下さるか、神様の

ご愛と恵みと力と御業を、神様の内に満ちている全ての宝を、この言葉を通して語って下さる。それはあくまで言葉であって、実態的に実質にその背後にある神様のご愛や恵みや力は、言葉で全部説明し尽くすことはできません。しかし、少なくともその言葉を通して、神様は私たちにご自身のいのちを注ぐ、私たちに神様の御思いを与えようと計画して、長い年月をかけながら、時代を越えて、いろいろな人を通してこのみ言葉が語り継がれてきたのです。その御言葉は聖書の言葉、神の言葉、キリストの言葉です。

「コロサイ人への手紙」3章16節に「**キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊かに宿らせなさい**」とあります。「宿らせる」とは常に蓄えておくことです。そう言われると記憶しなければいけないように思いますが、決して「暗記せよ」という意味ではありません。御言葉と触れあって、御言葉を心に抱いて、その御言葉と対話するといえますか、主の言葉から御思いをどのようにくみとるために、御言葉との交わりを繰り返し続けて行く。私たちは言葉を心に置くと、事あるごとに「あのお言葉はこの事の中でどういう意味になるだろうか」と考えさせられます。朝起きて夜寝るまで、また寝ている間もそうですが、常に心に思っていることが沢山あります。その思いの中に御言葉を常に置いていく。私たちの心にある思いは、子どものことを思ってみたり、テレビを見て聞いた言葉であったり、いろいろな言葉が常に心にあります。あるいは生活上のことや、家庭のことや細か

いことが常にあります。「あれはどうしようか」「あれはどうなるだろうか」「あんなことをしなければ良かった」と、心の中で、四六時中思いが巡っています。その中に御言葉を取り込んでくると、今度は「今私が受けているこの生活、この状況、この問題、この悩みの中で、御言葉は何と言っているだろうか。その御言葉はこう語っているけれども、私がここで具体的に何をどうすればいいのだろうか?」。常に御言葉との交わり、これが生まれてきます。できるだけそういう御言葉との対話といえますか、そういう思いをより多く心に持っておく、これがここで言われている「**キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊かに宿らせなさい**」ということです。覚えているだけではなく、聞いた言葉を自分の実際の生活の中で、「ここでどういうふうに応えて行くのだろうか?」「御言葉はこうあるけれども、私はここで具体的に、どの道を選ぶべきか、どうすれば良いだろうか?」と、御言葉を通して常に自分を顧みる。そして自分の歩み方を「そうだ、主が喜んで下さる道はここだ」と、そのような選択と決断を繰り返していく。しかも「豊かに」とあります。常にあふれるばかりに、するとみ言葉が絶えず私たちの心を巡っている状態になります。

「聖書を毎日旧約、新約、各一章ずつ読みましょう。聖書を通読しましょう」とお勧めしますが、通読はするが、お勤めで、「今日もこれだけ読んだ」と、一日の割当をこなす。そういう状態であっても、こうやって集会に出て、御言葉の解

き明かしを聞いて、自分の生活上のいろいろな事柄、出合いや軋轢(あつれき)や、また様々な悩みの中で、御言葉とどのように向かい合って生きて行くか、これが信仰生活にあって大切な事であります。だから、聖書の言葉、神様の言葉、これを抜きにして、信仰はあり得ないのです。成り立たないのです。人の言葉や、あるいは誰か偉い人や、哲学者や、道徳家の言葉では、私たちの心はそこまで変わりません。聖書の言葉、これはまさに神様の言葉、いのちの言葉です。その言葉を信じる、そこで御言葉をどのように決断し、どのように御言葉を取り入れ、御言葉にどこまで従っていくか？常にそのことが私たちの信仰生活の中心に置かれています。まさに、私たちの信仰は、聖書の言葉、神の言葉による、これ以外にないのです。

ある時、一人の方が尋ねて来られました。その方のお父さんが、がんの末期でホスピスに入っておられた。何とかお父さんのために、心安らかに過ごすことができ、また救われてほしいと願う、熱心な信仰を持った息子さんでした。それから私はホスピスに通いました。一週間に一回必ず彼の所へ通ったのです。初めのうちは「わざわざ来ていただいて……」と、恐縮しつつ、私の話を聞いておられた。病気の状況によって浮いたり沈んだりします。そういう中で、ある時その方が不満そうに「先生はよう聖書の話をしてくれますが、いつも聞いていると『言葉』『言葉』『言葉』言葉ばかりですな」と、なる程、確かにそうです。御言葉以

外に語る事が無い。彼が言うには、その方は田舎の出身の方でした。彼の生まれ育った所、そこには土着の信仰というものがある。こういう病気の時は、「これを煎(せん)じて飲め」とか、「行(ぎょう)をすれば治る」とか、あるいは「こういうことをしなさい」と、いろいろなことが決まっている。しかもちゃんとお祓(はら)いをしてくれる巫女(みこ)さんがいる。いうならば、その土地の信仰があるのです。そういう中で生まれ育ってきた彼にとって、「ただ、聖書の言葉を信じなさい」と言われるだけでは、物足りない。「今から物断ちやお百度を踏んだり、何かしなさい」とか、「こういうことを毎日続けなさい」「こういうことをやれば、あなたは変わりますよ」と、目に見えて、そして手でつかむことができるような、具体的なものが欲しいと言われるのです。そう言われてしまうと、無いのです。「聖書をつかんでごらん」と言ったところで、重たい聖書を上げたり下げたりしても何の役にも立たないでしょう。私はまだ若かったですが、どう返事をしていいか分からなかったのです。「実は先生には悪いと思ったけれども、里のほうに有名な、ご利益があるご祈祷師がおられるので、ちょっとその人をお願いしてみようと思います」と言われる。「あなたが良いと思うならそうなさったら」。ある時その祈祷師に病室に来てもらった。そして拝んでもらった。その後、私はその話を伺って「どうでしたか。だいぶ気分はよくなりましたか」と言ったら、「まあ、ですな」と。結局自分が死を目前にしながら、いろんなことをやってみてもどうしても心

は晴れない。何と言っても私たちにとって「聖書の言葉を信じる」ことこそいのちであり、力です。何と言っても、これしかないし、またたとえ「あなたがこういう善行を積み、驚くような奇想天外な業をすれば、この病気が治る」と言われると、何だかそれをすればすぐにでも結果が現れてきそうに思えます。けれども、何の役にも立たないことはよく分かる。ただ、“溺れる者はわらをもつかむ”で、とにかく具体的に「こうせよ」と言ってくれよ。「寒い中で滝に打たれよ」とか、「毎朝、水を百回ぐらいかぶれ」とか、そういう具体的な手応えのあることを決めてくれないと、自分は信じられないと。

私たちもそういう思いに捕らわれることがあります。「御言葉ばかり聞いているが、これでいいのだろうか」と。しかし、御言葉を信じること以外にないのです。「信じる」ことは、御言葉を理解することとは違います。信じてお言葉に従う。イスラエルの民は、エジプトから解放されてカナンの地を目指して旅をしました。いよいよカナンという所で、大きな失敗をしました。それはカナンを探りに行った人たちが伝えた話を聞いて、彼らは失望したのです。そして「こうなったらエジプトに戻ろう」と言い出した。そして「指導者であるモーセとアロンを殺してしまえ」と、激しい憎しみが起こった。そしてとうとう更に40年間荒野を放浪することになります。そのことに付いて聖書は「その聞いた御言は、彼らには無益であった。それが、聞いた者たちに、信仰によって結びつけられなかったからで

ある」(ヘブル 4:2) と語られています。彼らは、神様が「このカナンの地をあなた方に与える」と、「あなた方の土地とする」と約束した言葉を知っていたのです。だからヨシュアとカレブは「主にそむいてはなりません。神様が『よし』とおっしゃるなら必ずこれをくださるに違いない」(民数記 14:9)。彼らは約束を受けて出て来たのです。エジプトの奴隷の生活から解放されてカナンの地を目指し、「あなたがたに乳と蜜の流れる地、カナンをあなたがたの永久の住まいとする」と約束して下さった。それを信じて出て来たのですが、カナンには様々な困難があり、強い民が住み、到底太刀打ちできないという話を聞いたのです。なる程、事実強い人がいたかもしれないが、しかし、たとえ見るところ、聞くところが何であれ、主が「こう言われる」「神様がこうおっしゃるのだから行こうではないか」、神様はそこを期待したのであります。ところが、イスラエルの民は、聞いた言葉が、それが実際の行動に結び付いて行かなかった。

私たちの日々の生活でも同じです。聖書のお言葉を耳にたこができるぐらいに聞きます。聞くけれども、何か問題が起こったら、すぐに忘れる。そしてあちらに走り、こちらに走りして、行き詰った時に「やっぱり神様に頼るしかない」となる。そこで初めて御言葉を聞いて「神様の御言葉に信頼して、落ち着いて、すがって行きましょう」と、そこで落ち着いた時「聖書の御言葉はこんなに素晴らしい」と体験する。16節に「キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊かに宿ら

せなさい」。御言葉を心に抱いて守る。これが信仰生活の具体的な歩みです。何をするとっても、確かに礼拝を守ることにも御言葉に従っています。また、いろいろなことの中で御言葉を信じて、そこに自分を委ね、自分を懸けて行くのです。

ペテロがイエス様に招かれて弟子になるきっかけとなった出来事は、「ルカによる福音書」5章に書かれています。ガリラヤ湖で漁(りょう)を終わって帰って来たペテロ、ちょうどそこにイエス様が来られて、群衆もイエス様の話を聞こうと集まって来ました。イエス様はお話しする場所がなく、ペテロに頼んで船を少し沖へ出して、そこからお話をなさった。お話が済んだ後「沖へ出て網を下ろしてみなさい」とイエス様がおっしゃる。その時ペテロは、「先生、わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れませんでした」と答えます。まさにその通りだったので。何も取れないで網を洗って仕事仕舞いをしていた。そこへイエス様が来られた。その時にペテロは、「しかし、お言葉ですから、網をおろしてみましよう」と。彼は自分の経験として不可能だった事態を認めた上で、なおかつ「御言葉ですから、信じてそのように従います」と心を決めた。そして網を下ろしたところ、おびただしい沢山の魚が取れた。一そうの船では間に合わず他の船まで手伝いに呼び寄せるほどに取れたという。その体験をした時に彼は、「まことに自分は罪深い者である」と、こんな者は滅びて当然だと思った。ところがイエス様は「あなたを、人をとる漁師にしてあげよう。わた

しに付いて来なさい」と。彼はそこで網も船も捨てて、今度はイエス様に従ったのです。御言葉に従うことは、どんな大きな恵みであるか、御言葉に従っていくことが、実はイエス様と共にいることです。私たちはそのことが絶えず問われています。何よりも御言葉が私たちの力となり、また具体的にその力を神様はあらわして下さるのです。

「列王紀下」7章1,2節を朗読。

これはイスラエルの国がスリヤという国から戦いを挑まれ、サマリヤの町が十重二十重に包囲され、完全に食料を断たれてしまう。そのために人々は大変苦しい目に遭います。やがて神様がエリシャに語ったのがこの1節です。「主の言葉を聞きなさい」と。神様は「あすの今頃サマリヤの門で、麦粉一セアを一シケルで売り」と、シケルというのはどの位の単位であるか分かりませんが、いずれにしても安売りされるという、麦粉、大麦が安く手に入る時がくると。そんなことは信じられない現実です。町の周囲にはスリヤの大群が陣営を敷いて、兵糧(ひょうろう)攻めにしている。到底信じられない。それを聞いていたひとりの副官とあります。イスラエル王の右腕になる人でしょう。「その人の手によりかかっていた者」とありますが、王様が信頼していた部下です。その人が2節の終わりに「たとい主が天に窓を開かれても、そんな事がありえましようか」と言う。「いくら神様が天の窓を開いたって、あしたの朝麦粉や大麦が安売りされるなんて、そんなこと

があるわけがない」と言ったのです。それに対してエリシャが「あなたは自分の目をもってそれを見るであろう。しかしそれを食べることはなかろう」と。なんだか意味深長なことをエリシャが言う。「あなたは目でそれを見るけれども、食べることはない」と。その後お読みいただいたら分かりますが、実はサマリヤの門の入口に4人の重い皮膚病を患った人がいました。ひもじくてたまらない。食べる物が無かったのです。いろいろと考えた。今から町に入っても、町は兵糧攻めで食糧が無い。するとやはり飢えて死ぬに違いない。といてこれから出掛けに行ってスリヤの陣営に行けば捕らえられて殺されるかもしれない。そうなったら自分たちは命が無い。町の中にとどまっても、出て行っても命が無い。だったらいっそ出て行こうと、彼らはそう決めてスリヤの陣営へと命ごいに行く。ところが、行ってみたら何と全ての天幕がもぬけの殻です。神様がスリヤ軍に一つの幻を見せて、物音を聞かせた。それに怖気づいた彼らは取る物も取らず、一目散に逃げてしまった。陣営に行ってみると、手つかずの食料がたまっている。彼らは大喜びをして沢山食べた。ところが、この4人はだんだんと怖くなった。「自分たちだけこんなに食べていていいのだろうか。やっぱり町の人に知らせなければいかん」と、それで彼らは町へ帰って来た。そして「スリヤの陣営には誰もいなくて食料が沢山ある」と告げる。それを聞いた人たちは皆出て来て、彼らの食料を全部かすめた。持ち帰った食料を管理したのがその副官、最初に「そんなことはあ

るわけがない」と言った人です。

「列王紀下」7章16,17節を朗読。

まことに気の毒です。この副官は王様に命じられ、大混乱となったところへ行って指揮をとれと命じられた。やって来たはいいけれども、興奮した人々によって彼は押しつぶされて、死んでしまったのです。なる程エリシャが言ったように目には見たのです。麦粉も大麦も沢山売られる姿を見ましたが、とうとう彼は食べる間もなく死んでしまった。16節の終わりに「主の言葉のとおりになった」と。神様のお言葉は生きた言葉、いのちに満ちた言葉です。最初にエリシャが「あすの朝、麦粉、大麦が安売りされる」と言った時、彼は「幾ら神様が天の窓を開いたって、そんなことはあるわけがない」と豪語した。その時エリシャは、「あなたはそんなことを言っているけれども、見るだけであなたは食べられませんよ」と、その通りになる。私たちの信じる聖書の言葉は、まさにいのちがあり、力がある。人を導き、人を新しく造り替えていく。私たちのうちに御言葉がとどまることは、何よりも大切です。

「コロサイ人への手紙」3章16節に「キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊かに宿らせなさい。そして、知恵をつくって互に教えまた訓戒し、詩とさんびと霊の歌とによって、感謝して心から神をほめたたえなさい」。先程の「テモテへの第二の手紙」にありましたように「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたも

のであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導く」ものです。御言葉は、私たちの心と意思を探り、一つひとつ穢れを除き、清めて、義なる者として下さると、そのように約束されている。その通りです。ここに言われているように「豊かに宿らせなさい。そして、知恵をつくして互に教えまた訓戒し、詩とさんびと霊の歌とによって、感謝して心から神をほめたたえなさい」と。互いに自らを清くし、また義に導かれて行く。正しい道に私たちを歩ませて下さるのは御言葉の力によるのです。だから、誰か偉い人の話ではなく、常に聖書の言葉だけに立ち返る。

「ヘブル人への手紙」4章12節を朗読。

ここに「神の言(ことば)は生きていて」とあります。生ける神の言葉、生きて働く、力ある言葉。「もろ刃のつるぎよりも鋭くて」、私たちの心と意思とを切り分ける。「関節と骨髄とを切り離すまでに刺しとおして」、心のあり様をきちっと現わしてくれるもの、これが聖書の言葉です。ですから、聖書の言葉は、決して慰めと喜びと励ましに満ちたものばかりとは言えません。時には自分にとってつらいことであり、痛いことであり、苦しいものと思われまます。「どうして私がこんな言葉に従わなければならないのか」と思うような事態ももちろんあります。だから、ある方は「時々飛ばして読みます。ここはやめところ」と、そこを読むたびに心が痛むから、痛む原因を早く取り除く方が良いのですが……。御言葉が私たちの意思を切り分けて、清めて、神様の御思

いにつないで下さる。また御言葉に立つ時、神様は力を与えて下さる。

イエス様はバプテスマのヨハネによって洗礼をお受けになって神の子とされました。聖霊が彼の上に下りました。イエス様は、聖霊に導かれて、荒野へ出て行きました。そこで40日にわたる試練の時間を過ごします。その試練に打ち勝った秘けつは何だったのか？それはイエス様が御言葉に信頼したからです。サタンがやって来て「あなたが神の子ならひもじい思いをしないで、目の前の石をパンに変えて食べたらどうだ」。しかし、その時イエス様は「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」と、そう言ってサタンの誘惑を退けました。また高い所へ連れて行って栄華を見せて「わたしをちょっと拝めばあなたにこの栄華をあげましょう」と誘う。それに対してイエス様は『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」と、打ち勝っていく。またサタンが「あなたがこの高い所から飛び降りてごらん。聖書には『天使が来て、あなたの足が石に打ちつけないように助けて下さる』とあるから、やっごらん」と、その時「神を試みてはならない」と、聖書の言葉をもってサタンの誘惑に打ち勝っていきます。これはイエス様が体験なさったことです。そして「そのように私たちも歩みなさい」と勧められているのです。常に御言葉に立ち返ること、聖書の言葉に心を置いていくこと。ところが、どういう訳か、他人の言葉にすぐ引っ掛かるのです。「あの

人はあんなことを言ったが、本心はこうに違いない」「いやきっと裏があるに違いない」。それを考えだしたら眠られなくなる。聖書の言葉を繰り返したほうが、余程安眠できるのですが、すぐ人の言葉に引っ掛かる。ニュースで聞いた言葉、あるいは新聞でちらっと見たこと、いろいろな言葉がこの世間には流れています。そこで常に「御言葉に立ちなさい」と勧められています。医者言葉にも引っ掛かります。ちょっと「うん？……、まあ、良いでしょう、このデータで」と言われると、「どうしてはっきり言わないのか。あの『うん？……』という一瞬の間は、何か含んでいるな」と、ありもしない心配を引き込んでくる。そのように私たちは弱い者です。だから、常に御言葉にしがみついてさえいれば、そういうものに打ち勝つことができますが、そこが緩むと、つい他のものがいろいろ入ってくる。

御言葉こそ私たちの信仰の原点であります。「コロサイ人への手紙」3章16節「キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊かに宿らせなさい」。いつもこのみ言葉が心に浮かんでくるといいますか、常に流れている。新幹線に乗りますと、車両の入口の上に電光掲示板があつて、文字が次々と流れる。「〇〇新聞ニュース・ソフトバンクが何とかかんとか……」と。大阪集会に行く時、新幹線でそれを見る。あれで随分ニュースを知るのです。「そんなことがあつたのか」と、到着するまで、ひっきりなしに次から次へと出てくる。「ただいま、徳山駅を通過しました」、ハッと見ると、なるほど徳山です。まさに

私たちの心にあの電光掲示板のように御言葉が常に留まる。そうすると皆さん、心配も思い煩いもなくなる。あるいは喜びと安心が湧いてきます。是非、他のものは見なくて良いですから、新聞なんか読んだら憂鬱になりますから、聖書の御言葉に絶えず心を潤されたいと思います。

私たちにとって何が私を生かし、力づけてくれるものであるか、支えてくれるか。もちろん「よみがえって下さったイエス様が私と共におられます」と、主のお言葉を信じます。今そのように主がおられることを信じますが、同時に、御言葉が、キリストの言葉が絶えず私たちのうちにとどまり続けていく。これが私たちのいのちであり、力である。また私たちにとっても大きな恵みであります。

「コロサイ人への手紙」3章16節に「キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊かに宿らせなさい。そして、知恵をつくして互に教えまた訓戒し、詩とさんびと霊の歌とによって、感謝して心から神をほめたたえなさい」。「心から」とあえて言われている。心から神様を褒めたたえているつもりですが、神様からご覧になれば、『何だ、口先だけだろう』と言われている気がします。心から神様を褒めたたえ、感謝したいと思います。

ご一緒にお祈りをいたしましょう。